

書



Kan-un Yokota (Kyozo Yokota)

「感物而动」(物に感じて動く)

2010年 136×35cm

素材：画仙紙・油煙墨

書

---

横田閑雲（本名：恭三）

「筆を執れば物書かれ、楽器を取れば音をたてんと思う」（『徒然草』第百五十七段）



何かに感じて思わず心が動く“感興”について、吉田兼好は『徒然草』でこのように述べている。これは、人間の何気ない心の変化をみごとに表現した言葉といえよう。何かにおもしろみを感じて思わず心が動く…“感興”は人間だけに与えられた崇高な感覚の一つだと思う。

筆を執って白い小宇宙に対峙するとき、作者はどのような感情を持つのか持たないのか。その意識が作為に満ちたままならば、かえって筆は進まない。幾度となく運筆を繰り返しているうちに、筆の動きがふと作為から無為に変わるときがある。感情が自然とほどけて、一歩高い境地に達した結果だと思われる。これこそ求めようとしても得られず、求めずして成ったものであろう。